

渡給歟王相者十二日可坐坤仍日數非幾至于大將軍忌者可口內令他所給可宜者
〔長秋記〕元永二年六月五日被納御胞衣略○中 件胞衣本條可埋地之由所見云々雖然近來多結附天
井等就中近日土用比也仍埋地儀可有憚仍沙汰良暫結附云々

〔閑窓瑣談〕第一 金神家相の論略○中

或ひは土用に土を不動といふ夫土用は四季に土公の在方ありて其土を動せば殃ひ有據なく
ば土公遊行の日を用ゆべしといふ若水邊か河の堤の下に門を構し家ありて洪水堤を崩さん
とする時土公を怖れ土を動かさず門の破をも防がずに置くべきか亦秋は土公の井戸に在ま
すゆゑに井を掘井戸がへすべからずといふ左はいへども他國は知らず江武の町々には初秋
七月の日年毎の例として井戸を治カざる所もなし此時土公憤を發し祟をなせし事を聞ず是如
何ぞや

八十八夜

〔假名曆註解〕八十八夜 立春ヨリ八十八日メナリ霜ノフルコト此時分ヲ限ナリ

〔改正月令博物筌三月〕八十八夜 立春の節より八十八日めをいふなり俗説に名殘の霜といふ
凡春の氣終り夏の火氣に變化するの節なれば霜も此頃よりふらざるをいふなるべし此とき
霜降れば草木のわかばへを損ずかねて其ふせぎをすべし綿をまくは此前後なり八十八夜の
前より四月五日までまくなり

〔百一錄〕元祿六年三月廿七日八十八夜

梅雨

〔假名曆註解〕入梅 芒種ノ後壬ノ日ヲ入梅トス六月節ノ後ノ壬ノ日ヲ出梅トスカクノ如ク三

十日ノ内ナリ出梅ト云フハ入梅アケル日ナリ又入梅ヲ梅雨トモ云フ本草綱目ニ曰ク梅雨
ノトキ衣ヲ沾バ腐黒ス其トキハ梅ノ葉ヲ煎シテ洗ヘバモトノ如クニナルト云ヘリ乃シ往古
ヨリ右ノ如ク言傳ルノミニテ梅雨ノトキニハ濕フカキコト奈何ト云フ其説曾テ無シ梅雨